

## NFRJ18 調査票の特徴

### — このデータで何が分析できるのか —

保田時男（関西大学）

#### 1. 報告の目的

本報告では、NFRJ18（第4回全国家族調査）でどのような分析が可能になるのか、調査票の内容と形式からその特徴について概説する。調査票の全体的な設計を概観することで、汎用家族調査の多様な領域を結び付けて、新たな研究課題や分析方法のアイデアにつなげてもらうことがねらいである。報告時には、ある程度整備されたデータをもとに、特徴的な項目についての概略的な集計を示すことができる予定である。

#### 2. 新しい調査内容

NFRJ18は反復横断調査なので、基本的な調査内容はこれまでの3回の調査を踏襲したものになっている。しかしながら、NFRJ98以来の20年間、および近い将来に予想される家族の変化に対応するために、今回の調査では家族の多様性をとらえる姿勢で調査票を設計した。

具体的な点でもっとも重視したのは、離婚やステップファミリーへの対応である。離婚の回数や時期をとらえるとともに、離婚した相手についても年齢や学歴などある程度の属性を尋ね、離婚時の子どもの有無やその後の同居などについても尋ねている。実子と養子も区別できるようにした。同様に、親の離婚経験の有無や時期も尋ね、実親と養親の区別もできるようにしている。計量的な分析が可能な一定のサンプルサイズが確保できている。

その他の部分でも、ある程度一般性が高まった生活様式については対応できるように模索した。たとえば、家事については従来、夫婦での分担を尋ねるのみであったが、夫婦以外で家事を担う家族の有無や、家族外のサービスの利用についても尋ね、実態により近づけるようにした。家族外の人々との交流や、家族外を含めた生活満足度など、家族を形成しない人々の生活もある程度把握できるようにした。また、同性婚や性自認、同棲、妊娠先行型結婚など、デリケートな部分についてもいくつかの項目を設けた。個別的には、その他にもNFRJ18研究会のメンバーからの提案をもとにした項目が、多く調査票に加えられている。

調査票の設計方針として大きく転換した別の側面としては、「過去」の測定を強化したことがあげられる。NFRJは基本的に対象者のいま現在の家族のあり方を正確に尋ねることを重視してきた。しかしながら、家族に関する問題の多くは、時間的に離れた経験や行動が関わってくる。今回の調査では、不正確な記憶のリスクを認めつつも、重要な過去の経験はなるべく尋ねる方針を取った。たとえば、結婚前後や子育て期における就業の有無や、子どもの保育所経験、乳児の世話経験など、過去の育児の様子はある程度把握できるように努めた。また、若いころの結婚や出産へのプレッシャーや、過去の家族介護の経験なども尋ねている。介護については、親・配偶者・きょうだいのそれぞれについて、将来、自分が介護をすることになると思うかも尋ね、過去に加えて将来の介護のビジョンもある程度捉えることも試みている。

#### 3. 形式的な改善

NFRJ18では形式的な点でも、いくつか調査票の作成方針に工夫を加えた。NFRJでは、結婚や離死別の時期、家族の生年や死亡年など、さまざまな「年」を把握するが、今回は、「本人の年齢」を中心として尋ねる方法を活用した。つまり、配偶者やきょうだいの年齢を、本人との年齢差で尋ねたり、親の死亡時期を当時の本人の年齢で尋ねたりすることで、暦年や他人の年齢を思い出すよりも答えやすいようにしている。また、従来は回答者の限定の指示（「配偶者がいる方のみお答えください」など）がやや入り組んでいたが、極力、スクリーニング質問のとび先だけで明確に区別できるように努めた。また、NFRJでは家族成員一人ひとりとの関係性を尋ねるダイアド集積型の設計を採用しているが、それぞれについて、婚姻状態、家計状況という基本属性を加え、基本的な分析に活用できる情報を強化した。これらの点がデータの品質に及ぼしている影響についても当日は報告する。

（キーワード：NFRJ、家族調査、調査方法論）